

播磨北西部の古代鉄生産研究の現状と幾つかの視点

村 上 泰 樹

はじめに

兵庫県南西部に位置する播磨地域、とくに播磨北西部の佐用郡佐用町、宍粟市は製鉄遺跡が集中する場所として知られている。その数は古代から近世を含めると、二〇〇遺跡以上確認されている^{1,2)}。

このうち、分布調査や発掘調査で古代の製鉄遺跡と認識されているのは三〇遺跡である。表一に掲載した遺跡のうち山平B遺跡(1)と西下野製鉄遺跡(13)と安積山遺跡³⁰⁾は、確認・本発掘調査により操業年代が古代の範疇と想定されている。その他は分布調査の結果をもとに時期が推定されていることをお断りしておく。古代製鉄遺跡の分布状況を見ると、その多くが佐用町域の大撫山・千種川流域に集中しているが、唯一安積山遺跡は宍粟市域に位置している。本稿では、当地域の古

代鉄生産について製鉄遺跡を対象とした考古学的視点からの検討と、奈良県高市郡明日香村の大官大寺跡より出土した「讃容郡驛里鉄十連」木簡の検討をおこなう。

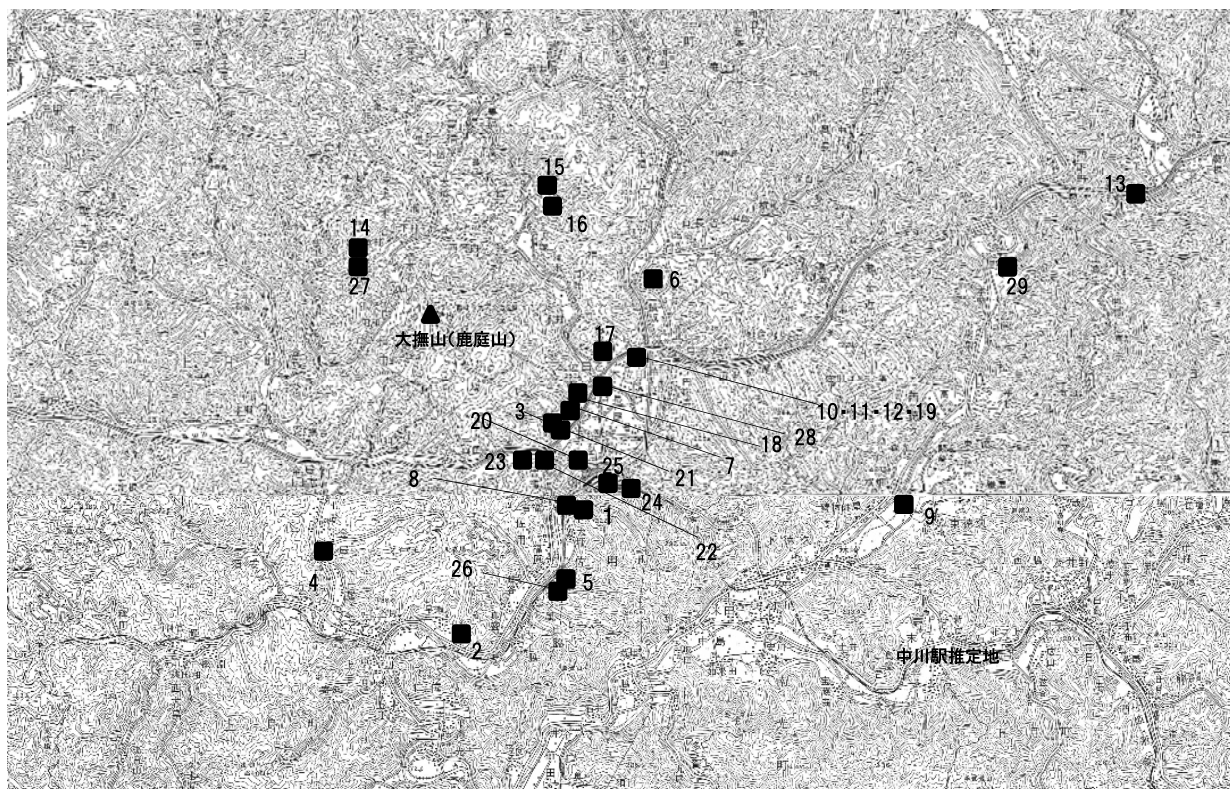
二 考古学的資料の概観

古代製鉄遺跡のなかには、発掘調査によって炉形や炉地下構造が明らかになったものがある。以下それらの遺跡について紹介する。

2 坂遺跡：千種川支流である佐用川の東岸域の丘陵裾部緩斜面上に立地している。大撫山周辺に集中する製鉄遺跡群のなかでは、最南端に位置する。製鉄炉下部構造は斜面地に対して横方向に造られており、炉は一・三×〇・七メートル前後の長方形箱形炉が想定されている。炉下部構造は地山まで掘り込まれ、焼固めた粘土が充填されてい

地域	遺跡番号	遺跡名	位 置	立地	遺 構	出土遺物	時期	備考	調査年度	参考文献
大撫山麓・千種川周辺	1	山平B遺跡	佐用郡佐用町佐用	丘陵裾部	鉄滓・炉壁廃棄層	鉄滓・炉壁・丹塗土器・須恵器	奈良時代（8世紀後半）	出土した炉壁の検討から長方形箱形炉と推定 高チタン砂鉄使用	1989～1990	文献1・2
	2	坂遺跡	佐用郡佐用町早瀬	丘陵裾部	炉下部構造・排滓溝	弥生土器（中期後半）	奈良時代 放射性炭素年代測定値：1200±80（A.D.750）	外法1.3m×0.7mの長方形箱形炉と推定 高チタン砂鉄使用	1988・1989	文献1・2
	3	永谷C遺跡	佐用郡佐用町長尾	谷部	炉推定部1基	炉壁・須恵器	奈良時代（8世紀後半）	2.4×1.4mの炉下部構造 高チタン砂鉄使用	1988～1990	文献1
	4	金屋中土井遺跡	佐用郡佐用町金屋	河岸段丘上	炉下部構造3基・炭土坑・排滓場	鉄滓・炉壁・須恵器・土師器・瓦器	平安時代	炉3:1.7m×0.7mの長方形箱形炉と推定 高チタン砂鉄使用	1984	文献1
	5	カジ屋遺跡	佐用郡佐用町山脇	尾根先端部	炉下部構造1基・周溝	弥生～中世の土器	奈良時代？	馬蹄形の周溝内に鉄アレイ形の炉下部構造、平面形 0.7m×0.5mの箱形炉を想定 高チタン砂鉄使用	1985	文献1・12
	6	横坂丘陵遺跡	佐用郡佐用町横坂	丘陵上	炉下部構造1基・排滓溝	鉄滓・炉壁	奈良時代頃と推定	0.7m×0.4mの長方形箱形炉	1993	文献1・2・4
	7	永谷B遺跡	佐用郡佐用町長尾	谷部	炉下部構造3基・排滓土坑・排滓溝	炉壁（箱形）・砂鉄・須恵器・土師器	奈良時代（8世紀中頃）	木呂穴のある炉壁出土 炉2：2.0m×0.7m×0.4mの長方形箱形炉 高チタン砂鉄使用	1989	文献1・3
	8	山平A製鉄遺跡	佐用郡佐用町佐用	河岸段丘上	土坑	鉄滓・炉壁・須恵器・土師器	奈良～平安時代	鉄滓・炉壁廃棄土坑	1988	文献5
	9	東徳久遺跡	佐用郡佐用町東徳久	河岸段丘上	土坑・横口付木炭窯	炉内鉄滓・炉内鉄滓	7世紀後半？	炉壁廃棄土坑・形状不明 木炭窯熱残留磁気測定 法値A.D.670年±20年	1992・1993・1996	文献2・文献4・文献6・文献7
	10	本位田権現谷B遺跡	佐用郡佐用町本位田	台地上	炉下部構造1基・土坑	鉄滓・炉壁	古代？	鉄アレイ型箱形炉、鉄滓・炉壁廃棄土坑	1995～1996	文献8
	11	本位田魚ヶ鼻遺跡（B区）	佐用郡佐用町本位田	台地縁辺部	炉下部構造痕跡	鉄滓・炉壁	未詳	炉痕跡（3.5m×0.4m）	1995	文献8
	12	本位田高田遺跡	佐用郡佐用町本位田	河岸段丘上	土坑	鉄滓・炉壁	古代？	鉄滓・炉壁廃棄土坑	1995	文献8
	13	西下野製鉄遺跡	佐用郡佐用町西下野（旧穴栗郡域）	丘陵裾部	炉下部構造5基・土坑	鉄滓・須恵器・砂鉄	奈良時代 初頭（8世紀初め）	長方形箱形炉（1.1m×1m）、鉄滓・焼土廃棄土坑・炭土坑 低チタン砂鉄使用	1972～1973	文献10
	14	木戸口製鉄A遺跡	佐用郡佐用町大木谷	丘陵裾部	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	15	仁方神庭神社製鉄遺跡	佐用郡佐用町仁方	丘陵裾部	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	16	仁方安井製鉄遺跡	佐用郡佐用町仁方	谷部斜面	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	17	池の堤製鉄遺跡	佐用郡佐用町本位田	台地縁辺部	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	18	長尾岡の平製鉄A遺跡	佐用郡佐用町長尾	尾根上	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	19	長尾森谷製鉄遺跡	佐用郡佐用町長尾	谷部斜面	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	20	山王タタラ製鉄遺跡	佐用郡佐用町佐用	台地縁辺部	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	21	福地製鉄遺跡	佐用郡佐用町長尾	谷部斜面	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	22	たたん谷製鉄遺跡	佐用郡佐用町長尾	丘陵裾部	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	23	かんだに製鉄遺跡	佐用郡佐用町長尾	谷部斜面	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	24	佐用坂製鉄遺跡	佐用郡佐用町佐用	丘陵上	—	—	奈良・平安時代	製鉄（鍛冶）	～2011（分布調査）	文献11
	25	上町製鉄遺跡	佐用郡佐用町佐用	尾根部先端	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	26	大坪製鉄遺跡	佐用郡佐用町佐用	尾根部先端	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	27	木戸口製鉄B遺跡	佐用郡佐用町大木谷	谷部斜面	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	28	長尾岡の平製鉄B遺跡	佐用郡佐用町長尾	台地縁辺部	—	—	奈良・平安時代	製鉄	～2011（分布調査）	文献11
	29	漆野段製鉄A遺跡	佐用郡佐用町漆野	丘陵上	—	—	奈良・平安時代	製鉄（一部消滅）	～2011（分布調査）	文献11
揖保川上流域	30	安積山遺跡	穴栗市安曇	丘陵斜面	炉下部構造12基・土坑	炉壁・砂鉄・須恵器	平安時代末	大型炉6基（4.6～7m×1.2～2m：舟底形）、小型炉5基（3×1m）、特殊炉（精錬炉？）・竈座（石組み）、土坑（炭土坑、砂鉄土坑）	1994～1995	文献9

表1 播磨北西部の古代製鉄遺跡一覧



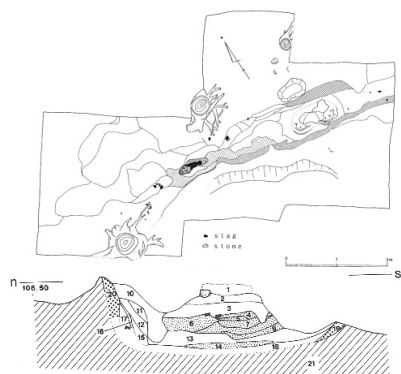
第1図 播磨北西部の古代製鉄遺跡

(縮尺任意 国土地理院発行「佐用・上郡」1/50,000をもとに作成)

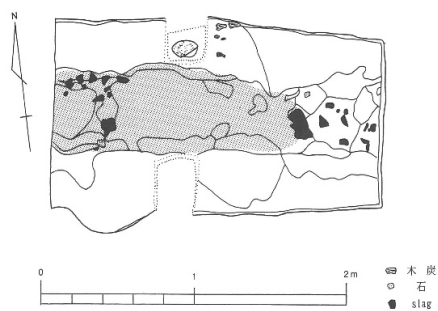
る。その状況から複数回の操業があったと考えられている。炉の斜面下方には、排滓溝、鉄滓溜まりが確認されている。^③原料には高チタン（二〇パーセント程度）が使用され、¹⁴C放射性炭素年代測定値はA・D.七五〇年（一二〇〇±一八〇）の年代を示す。^④

3 永谷C遺跡：大撫山南東側山麓の谷部に立地している。この谷部の斜面地には複数の製鉄遺跡（永谷A・B遺跡）が近接して存在する。調査の結果、炉下部構造一基と鉄滓集中場所が検出されている。出土した炉壁のなかには、木呂穴をもつものも確認されている。炉下部構造は二・四×一・四メートル程度の規模と推定されている。遺物は鉄滓集場所より八世紀後半の土器が出土していることから、操業時期は奈良時代後半頃と推定されている。^⑤

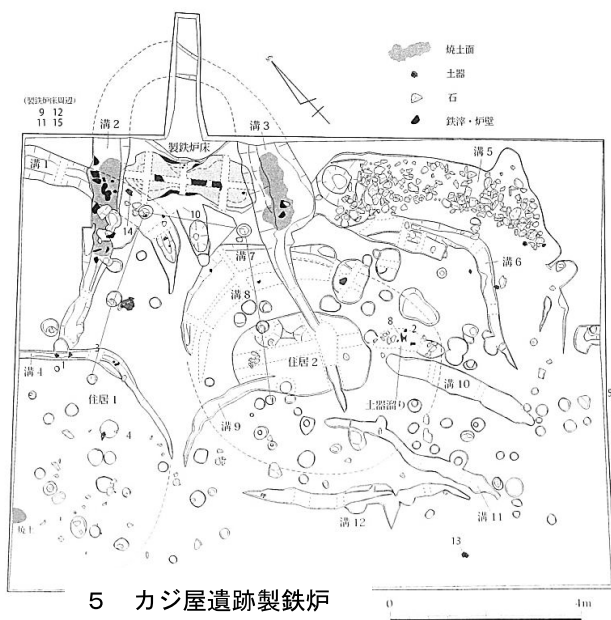
4 金屋中土居遺跡：大撫山の南西部、河岸段丘上の平坦部に立地する。三基（炉床一・三）の製鉄炉下部構造と排滓場と推定される鉄滓集中場所と炭が充填された土坑が確認されている。製鉄炉下部構造はいずれも東西方向に長い長方形を呈し



2 坂遺跡



4 金屋中土居遺跡 2号炉



5 カジ屋遺跡製鉄炉

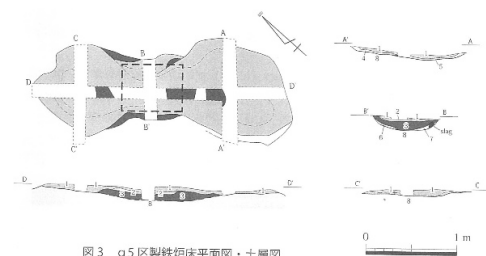
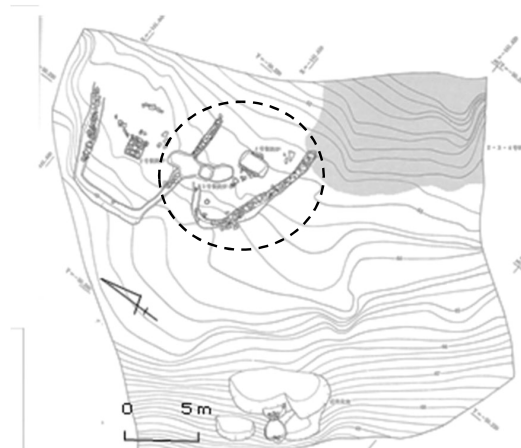
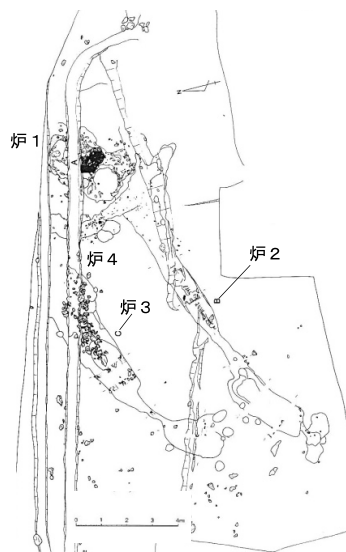


図3 a5区製鉄炉床断面図・土器窯

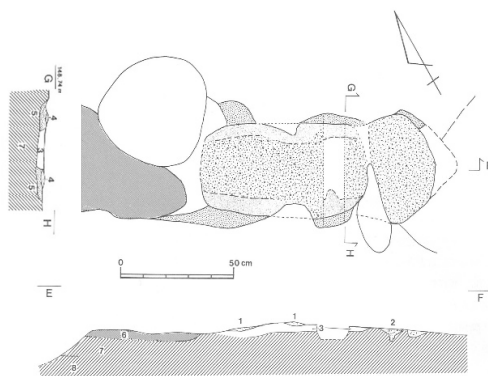
5 カジ屋遺跡製鉄炉



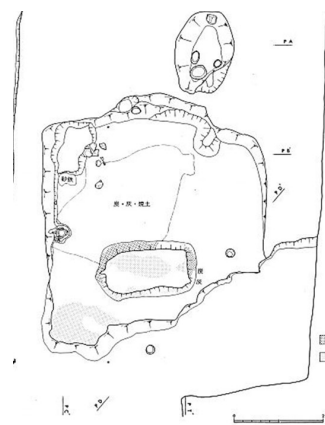
参考：岡山県総社市千引カナク口谷 4号炉



7 永谷B遺跡製鉄炉



6 横坂丘陵遺跡



13 西下野遺跡B地区
下部域たたら炉

ており、炉床二の長軸方向は不明であるが、短軸方向一・三メートル、深さ〇・二メートルの掘方が確認されている。炉床三は約一・七×〇・七メートルの規模で、深さは不明である。炉下部構造内には炭・焼土が充填されており、長方形箱形炉と推定されている。炭が充填された土坑は、炉床三の南東側に近接している。この炉の時期については、調査当時は六世紀代まで遡ると考えられていたが、その後、周辺に平安時代の遺構が多いことなどから、同時期の可能性が指摘されている^⑥。

5 カジ屋遺跡：大撫山の南東部に位置し、千種川支流の佐用川東岸域に張り出した尾根の先端部に立地する。斜面上方から下方に向かって馬蹄形に広がる周溝とその中に中央部分が括れた鉄アレイ状の平面をもつ製鉄炉下部構造が確認されている。〇・七×〇・五メートルのほぼ正方形の製鉄炉が想定されており、その両脇に直径一メートルの不整円形に炭混じりの土が広がっている。その規模は長軸二・八メートル、短軸一メートルである。掘方は一・三×〇・七メートル、深さ〇・一メートルの規模である。炉床と推定される中央部

分は一五センチメートルほど掘り窪められ、炭混じりの焼土が充填されている。炉の周囲を馬蹄形に取り囲む周溝内から多量の鉄滓、炉壁片が出土しており、炉と周溝は同時期に併存したと考えられる。操業時期は周辺の製鉄遺跡の事例から奈良時代の範疇と理解されている^⑦。

6 横坂丘陵遺跡：大撫山の東側に位置し、佐用川東岸域に西向きに張り出した丘陵上に立地する。製鉄炉下部構造とそれに連結した排滓溝、鉄滓廃棄土坑が確認されている。炉下部構造は斜面に直行して築かれており、その形は一・〇五×〇・四メートル、深さ三センチメートルの規模で、長方形を呈している。長辺部側には幅七センチメートルほどの焼土塊がみられ、炉壁基部の可能性が指摘されている。排滓溝は炉の西側小口部分から〇・六メートルの幅で二メートル以上の長さで尾根西斜面に向かって延びている。深さは四センチメートルと浅い。

炉下部構造の東側部分が多少北側にずれている状況から、炉の規模はこの部分を除いた〇・七×〇・四メートルの規模と推定されている^⑧。

7 永谷B遺跡：大撫山南東側山麓の谷部に立地している。同じ谷部には奈良時代後半頃の製鉄遺跡である永谷C遺跡がある。

調査の結果、三基の炉下部構造（炉一→三）と排滓溝が確認されている。炉一は複数の炉下部構造が重なっていると考えられ、平面の形状・規模は不明である。深さ〇・二五メートルの播鉢状の掘り込みが確認され、掘り込み内には厚さ十センチメートル程の粘土が貼られ、炭・焼土・鉄滓を含む層が重なっている。上面には炉壁塊が貼り付いた状態で見つかっている。炉二は排滓溝内に構築されており、二×〇・七メートル、深さ〇・四メートルの長方形の炉下部構造が確認されている。底には人頭大の礫が敷かれ、その上に炭・焼土層が充填されている。礫および壁面の一部は被熱により赤化している。炉三は幅一・五メートル、深さ〇・三メートルの溝内に長さ三メートルの範囲に集石が見られ、この範囲が炉下部構造と推定されている。炉一と炉三の間に炉四の存在が確認されている。出土遺物は須恵器、土師器とともに送風孔のある炉壁片が見つかっている。炉は炉二↓

炉四↓炉一↓炉三と考えられており、炉二が最も古い。炉一は地面を浅く掘り窪めた炉下部構造をもち、炉二・三はいずれも排滓溝内に炉が構築されており、下部構造内に礫が敷かれていることが特徴である。規模も長さが二メートルを超える大型の長方形箱形炉と推定される。操業時期については、いずれも遺構に伴う土器が出土していないため、周辺で採集された奈良時代の須恵器片や八世紀後半の操業と考えられている永谷C遺跡の存在から、この時期に収まると推定されている。

13 西下野製鉄遺跡：現在は佐用郡佐用町に属しているが、もともとは旧穴栗郡に属する。大撫山周辺に立地する他の製鉄遺跡とは異なり、千種川支流の志文川に面する山地斜面上に立地する。二箇所調査区より五基の製鉄炉下部構造と炭・砂鉄置場、製鉄炉の上屋と考えられている建物跡が見つかっている。A地区上部域で発見された炉下部構造は、二・一六×一・七メートル、深さ〇・二五メートルの規模で、隅丸長方形を呈する。A地区下部域のたたら炉（イ）は一・一×一メートルの方形に近い平面形をしている。周辺には炭土

坑が確認されている。炉は斜面地を削平し、盛土された上に築かれていたと思われる。炉下部構造内は未調査のため詳細は不明である。B地区下部域で発見された炉下部構造は二・二五×一・二四メートルの長方形の平面である。斜面部を一辺五メートルの規模で正方形に地山を削り出し、その上に盛土をせず、直接炉下部構造と炉を築いたと考えられる。炉の西側には砂鉄置場が検出されている。操業時期は、五基の製鉄炉はほぼ同時に操業したと認識されており、出土した須恵器の年代から奈良時代初頭（八世紀初頭）に比定されている。^⑩

30 安積山遺跡：揖保川とその支流である引原川の合流点にあたる宍粟市安曇地区に位置し、南向きに張り出した山地の東斜面地に立地する。斜面地に三段の削平地（下方から平坦地Ⅲ・Ⅱ・Ⅰと呼称）を設けている。このうち平坦面ⅠとⅡでは何回かの整地層が認められ、整地層ごとに製鉄炉が構築されたことがわかっている。また、平坦面は下方から上方に向かって平坦面Ⅲ↓平坦面Ⅱ↓平坦面Ⅰの順に構築されていることが確認されて

いる。これらの平坦面で全長が四・六メートルを超える下部構造をもつ大型の箱形炉六基、長さが3メートル前後の小型炉五基、長さ〇・九メートルの特殊炉一基、合計十二基の製鉄炉が確認されている。大型炉、小型炉の下部構造は両木口部分が傾斜して立ち上がる、所謂舟底状の土坑が多く見られる。土坑上面には炉床の痕跡が残っている。Ⅰ―Ⅷ号炉では箱形炉壁が引き倒された状態で見つかっており、箱形炉の規模が確認できる極めて良好な遺存状況である。操業時期は出土した須恵器の年代から、平安時代後期から末期にかけて連続して操業されたと考えられている。この時期、箱形炉の規模が大型炉から小型炉への変化するところが把握できる遺跡である。^⑪

播磨北西部の古代製鉄遺跡は、砂鉄を原料とした長方形箱形炉である。その分布は、古代讃容郡（現佐用町周辺）の鹿庭山（大撫山：標高四三六メートル）を中心に分布しているが、千種川中流域に位置する八世紀初頭の西下野製鉄遺跡、揖保川流域の安積山遺跡は古代宍粟郡内に位置する。

この地域の鉄生産は金屋中土居遺跡の六世紀後半頃に始まると考えられていた。その根拠となつたのが、同時期の須恵器の出土である。しかし、その後佐用町教育委員会が調査資料を精査した結果、この時期まで遡る伴出遺物は確認されていないことから、時期については不明とした。そして周辺の遺構の時期から平安時代まで降る可能性あるとの見解を提示されている。⁽¹²⁾

これまで紹介した播磨北西部の製鉄遺跡のうち歴史的・技術的変遷を探索上で定点になると考えられるのが、八世紀初頭頃の須恵器が伴う西下野製鉄遺跡、¹⁴ C放射性炭素年代から八世紀中頃と推定される坂遺跡、八世紀後半の須恵器を伴う永谷C遺跡、平安時代後期～末期の須恵器を伴う安積山遺跡であろうか。

西下野製鉄遺跡をはじめこれまで紹介した製鉄遺跡については潮見浩氏⁽¹³⁾や土佐雅彦氏⁽¹⁴⁾等によって紹介され、とくに土佐氏は古代から中世の製鉄遺跡や『播磨国風土記』等の文献史料をつかい、当地域の鉄生産について総括的な研究を行っている。⁽¹⁵⁾ 古代の分野については、坂遺跡の製鉄炉が初源的

な様相をもち古墳時代に遡る可能性や、大撫山周辺の製鉄遺跡で使用されている砂鉄原料が、高チタン砂鉄であることに注目し、佐用町に隣接する岡山県側の製鉄炉との関連性、さらに吉備地域との関わりについても言及されている。『播磨国風土記』讃容郡条に当地の製鉄の開発者である「別部犬」が吉備東部を支配した和氣氏に通ずることから、播磨の鉄生産に吉備勢力の関わりを強く示唆されている。

近年、より広域的視野からの研究もはじまっている。大道和人氏は七世紀の箱形炉を中心に炉の設置方法、長さ、地下構造の視点から箱形炉の分類を行っている。その中で播磨地域の製鉄炉を抽出し、カジ屋遺跡を横置き、炉長軸五〇センチメートル前後、地下構造の掘形が長方形・正方形のA2型に分類している。A2型は吉備地域を起源とし、六世紀第4四半期～八世紀第2四半期（Ⅱ期～Ⅴ期）の長期にわたって採用された製鉄炉と理解し、カジ屋遺跡の年代を七世紀第2四半期～第3四半期（Ⅲ期）に比定されている。また佐用町坂遺跡をA2型より大きい、炉の長さが一メートル

ル程の規模をもつA3型に分類し、その年代を六世紀第4四半期から七世紀第1四半期(Ⅱ期)に比定されている。近江を中心とする近畿地方を起源とする炉長が一・五メートルのE1型に佐用町金屋中土居遺跡、佐用町西下野遺跡の炉を比定し、その年代を金屋中土居遺跡がⅡ期に、西下野遺跡を八世紀第2四半期頃(V期)に比定している。播磨地域の製鉄の開始は吉備地域を起源とする坂遺跡(A3型)と金屋中土居遺跡(E1型)より始まり、その開始が六世紀代まで遡る可能性が示唆された。⁽¹⁶⁾

平安時代後期～末期の安積山遺跡は古代末から中世へ移行する時期の製鉄遺跡として研究の俎上に上がっている。角田徳幸氏によれば、安積山遺跡の製錬炉を分類され、大型の炉を本床状遺構のみもつ地下構造のA1-b型、小型炉を粘土ブロック帯による本床状遺構をもつ、A2-a型に分類し、これらの形態は現時点では本遺跡でのみ確認されている炉形であると指摘されている。⁽¹⁷⁾

播磨地域独自の製錬炉の存在を示唆しており、興味深い。

以上、播磨地域の製鉄遺跡に関連した近年の研究を紹介した。これ以外に少し気になる遺跡がある。大道氏の研究では、播磨地域の鉄生産の開始に關与する遺跡として、佐用町坂遺跡・同金屋中土居遺跡(六世紀第4四半期～七世紀第1四半期)をあげられているが、坂遺跡については¹⁴C放射性炭素年代測定でA・D・七五〇年(一二〇〇±八〇)の値がでている。金屋中土居遺跡については、その後の資料精査で六世紀後半を裏付ける遺物が確認されていない点があげられ、両遺跡の年代については再検討が必要になってくる。筆者は現時点の資料では大道氏分類のA2型で七世紀中頃に比定されているカジ屋遺跡を候補にあげておく。

カジ屋遺跡では、製錬炉を囲む形で、馬蹄形の周溝が巡っている。これに近似した周溝をもつ製鉄遺跡がある。最古級の製鉄炉である岡山県総社市奥坂遺跡群の千引カナクロ谷製鉄遺跡である。カナクロ谷四号炉は二・〇五×一・三五メートル、深さ〇・二五～〇・五メートルの隅丸長方形の炉下部構造をもち、壁際には石積を施した造りであ

る。その周囲を馬蹄形に溝が巡っている。⁽¹⁸⁾ 溝は排水機能をもつと考えられる。この四号炉の年代は六世紀後半に比定されており、同じ形の周溝をもつ両遺跡の類似性は、カジ屋遺跡と古代吉備地域との関連性や播磨の鉄生産の開始を探る上でひとつの検討資料になると考える。

古代製鉄遺跡の分布は、『播磨国風土記』讃容郡条に記された「鹿庭山」周辺の鉄生産の記載とほぼ整合すると理解できる。また、同書の穴禾郡御方里（穴粟市内）や敷草村（穴粟市千種町周辺）でも「生鉄」の記述がある。『千種町史』によれば、千種町河呂付近で三基以上の製鉄炉が確認されている。工事中の発見であったため破壊されてしまったが、七世紀後半と奈良時代の須恵器が表採⁽¹⁹⁾されている。播磨地域の鉄生産の開始が七世紀まで遡る可能性と、敷草村付近で古代製鉄遺跡が確認できたことになり、これも『播磨国風土記』の産鉄記事と符合する。

三 木簡史料について

『播磨国風土記』ともに播磨北西部の鉄生産を裏付ける史料に、奈良県高市郡明日香村大字小山の大官大寺跡から出土した左記の木簡がある。

「く讃容郡驛里鉄十連」

156×35×6 032

（木簡番号三六三二）

この木簡は、古代の鉄生産を解明する上で重要な文字史料であるが、あまり検討されていない。そこで本稿では、この木簡について詳細に検討し、その内容を明らかにしたい。

木簡が出土した大官大寺は百済大寺（造営舒明天皇十一年（六三九）に由来し、天武二年（六七三）高市に移建され高市大寺と称される。その後、天武六年（六七七）に大官大寺と改称された。その後現在の位置に移り、その造営は発掘調査の結果によって文武朝（七世紀末期）まで降ることがわかっている。木簡は東面回廊の東にある土坑内より出土しており、播磨国讃容郡から貢進された荷札と考えられている。⁽²⁰⁾ 時期については里名の一字表記から大宝（和銅初年（八世紀初頭））にかけての年代が想定されている。⁽²¹⁾

木簡に記された「讃容郡驛里」は『延喜式』に

よれば、播磨国駅馬として「中川馬五疋」を置いたことが記され、また『和名類聚抄』には讃容郡内の駅として記載がある中川里と考えられている。⁽²³⁾『播磨国風土記』によると「中川」の地名は、同地に住んでいた苦編首の先粗が大仲子であったことから名付けられたとしている。⁽²⁴⁾

「中川里」推定地は佐用町新宿説、讃容里付近（佐用町長尾付近）説がある。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾前者の新宿地区の南側には美作路が通り、駅関連施設と推定されている奈良時代から平安時代の瓦が出土している新宿廃寺跡がある。また中世段階の資料ではあるが、新宿集落内に台座に「嘉慶二（一三八八）八月一九」、「播磨国 中津河」の銘をもつ『新宿墓地宝篋印塔』（県指定物石造物）がある。⁽²⁹⁾これらのことから、中川駅は新宿地区付近が有力と考える。次に「鉄十連」について考える。鉄と連の使用事例をみると、九世紀に成立した養老令の注釈書『令集解』や『令義解』の喪葬令には「凡職事官薨卒賻物」として太政大臣「鉄十五連」を筆頭に従五位「鉄二連」まで官位に応じて鉄素材が下賜される規定になっている。

木簡番号	内 容	寸法(ミリ)	形式番号	出土遺跡・遺構	出 典
2834	上道郡浮浪人調鉄一連	183,21,4	032	平城宮東院地区西辺 S D 313 4	平城宮2-2834(城3-9上(143))
	美作国勝田郡和気郷輪調鉄壹連○□	(277),25,7	039	平城宮東院地区 S D 3236 C	城12-16下(132)
4669	備中国賀夜郡□〔祁力〕□□調鉄一連	186,17,4	032	平城宮 S D 4100	平城宮4-4669(城4-20上(404))
439	美作国英多郡大野里鉄一連	178,(21),2	031	平城京左京三条二坊一・二・七・八坪長屋王邸 S D 4750	平城京1-439(城21-32下(355)・木研11-16頁(92))
	備後国沼隈郡調鉄十廷○天平六年	206,20,4	031	平城京左京三条二坊二条大路濠状遺構（南） S D 5100	城22-38上(408)
	←□〔野力〕郷御調鉄一連 ◇ 七年十月	(165),23,5	039	平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構（北） S D 5300	城29-37下(457)

表2 調物鉄の単位標記(奈良文化財研究所 木簡データベース使用)

次に表二の平城京出土の木簡史料を見てみる。すべて鉄素材を調物として貢納した際に用いた荷札である。鉄の単位表記に「連」と「廷」が使用されているが、「備後国沼隈郡」を除き「連」が用いられている。

「上道郡浮浪人調鉄一連」木簡は備前南部地域に比定でき、古代吉備地域が有

力な平城京への鉄素材供給地であったことが窺える。⁽³²⁾調物ではないが、『常陸国風土記』香島郡条

に豊香嶋宮への供物として「枚鉄一連 鍊鉄一連」の記載が見える。⁽³³⁾以上「連」の使用例を列挙した。それでは「連」はどのような単位であろうか。

樋口知志氏は、古代の堅魚の単位に用いられた「連」について「一連は一定個数の乾しカツオから成っていた可能性が高いと思われ、おそらく一〇個で一連とされたのではなからうか」と推定している。⁽³⁴⁾海産物の事例ではあるが、「連」は幾つかのものを纏めた員数単位と理解できる。鉄の場合、木簡の事例では「連」と「廷」が使用されていることから、幾つかの「廷」を纏めたものが「連」であると理解できる。

では一連は何廷で構成されているかについて言及すると、『飛鳥の工房』では「石山寺の造営では、鉄工物部根万呂が天平宝字六年正月のある日、鉄二連（重さ七斤一三両）を素材として〈後略〉」と記載されている。⁽³⁵⁾『正倉院文書』造石山寺所関連文書の天平宝字六年の記載では「二廷七斤一三両」がある。⁽³⁶⁾そうすると二連と二廷が同じ重量となり、一連一廷の計算になる。「一連一廷」説については、員数単位である「連」と矛盾する。

自天平宝字六年	単位	重 量			※両換算	「得」	「損」	損率(%) (「損」／重量)	典拠
正月一六日	鉄一廷	3	斤	12	60	3斤 1 両	11両	18.3	『大日本古文書』 (編年文書) 卷 十五卷二九二 ～三〇六頁
	鉄一廷	3		8	56				
	鉄一廷	3		6	54				
	鉄一廷	3		14	62				
	鉄一廷	3		3	51	2斤10両	9両	17.6	
	鉄一廷	3		9	57	3斤 1 両	8両	14.0	
	鉄一廷	3		11	59	3斤	11両	18.6	
	鉄一廷	3		5	53	2斤11両	10両	18.8	
	鉄一廷	3		11	59				
正月一九日	鉄一廷	2		14	46	2 斤14両	0	0	
	鉄一廷	3		6	54	3斤6両	0	0	
平均 (一廷)：÷55両 (3斤7両) ※一斤＝一六両換算									

表3 鉄一廷あたりの重量

表二の調物としての鉄の記載には、「一連」と「一〇廷」がある。少ない史料ではあるが、多くが調物「鉄一連」とあり、調物としての鉄の標準が「二連」であることを連想させる。筆者は「備後国沼隈郡の鉄十廷」は表記の違いで二連＝一〇廷を表し

ているのではないかと考えている。

また、時代が遡る事例ではあるが、渡辺誠氏は

釜山市東萊福泉洞古墳群の第二二墳（四世紀後半（五世紀前半）の副葬品の鉄鋌の出土状況が一〇点ずつに別れて出土していることに注目され、一〇点一単位で我国に輸入されたのではないかと指摘されている⁽³⁷⁾。また、小田富士雄氏は、滋賀県新聞第二号墳で十枚一組で鉄鋌が出土している点等から鉄鋌の一組が十枚、後の一連が十枚ではなかったかと推察されている⁽³⁸⁾。以上のことから鉄一連は一〇廷の纏まりと考えたい。

次に「廷」について考える。『正倉院文書』造石山寺所関連文書には石山寺造営に係る鍛冶関係の記載がある。鉄の単位（廷）・重量（斤両）・製品（主に鉄釘）数量が併記され、また、「得」、「損」といった歩留まりが記載されたものがある。表三は鉄一廷と記載されたものを抽出しその重量と「得」・「損」の歩留まりを表化したものである。一廷あたりの重量は二斤一四両から三斤一四両と幅があるが平均すると三斤七両となる。しかし『令集解』⁽³⁹⁾ 祿令第一五には「鐵以十斤為一廷」の記述があり、三斤七両の約三倍になっている。祿令の「一廷」一〇斤」の表記はおそらく「小両」

（小制）表記であろうと考えている⁽⁴⁰⁾。また鉄素材の品質については「得」・「損」の記述に見ることができる。「損」率は概ね一八パーセント前後であったことが推察できる。またわざわざ「无損」と記載したものもあり高純度の鉄素材も含まれていたと考えられる。

「鉄十連」の重量は、一連一〇廷とすると三四三斤一二両（三斤七両（五五両）×一〇〇廷）となる。これを現在の重量に置き換えてみる。大隅亜希子氏⁽⁴¹⁾や畑中彩子氏⁽⁴²⁾の研究によれば、「十両」約四〇〇グラム（一両≒四〇グラム）と想定されている。この成果をあてはめると、約二二〇キログラム前後になる。

「鉄十連」は調物（一連）としては量的に多く、喪葬令による正従一位への賻物に匹敵する。こうした鉄素材の生産は製鉄遺跡の分布状況から、現在の佐用郡佐用町域の大撫山周辺および千種川流域に集中する製鉄遺跡群よりもたらされたことは言うまでもない。

この木簡が官寺である大官大寺造営に関係して「駅里」より貢進されたものであるが、中村弘氏

は、『播磨国風土記』が基本的に駅家に関する記載をしていないこと、讃容郡例についても「中川里」と「駅家」の両方の呼称が存在した可能性を指摘し、鉄の貢進に駅戸集団の関与を否定している。⁽⁴³⁾この説に従うと、大官大寺への鉄素材の貢進は「中川里」を中心におこなわれたことになるのであるうか。先に述べたように「鉄十連」はその鉄量から調物とは考えられず、調以外の特別な貢進であつたと考えられる。大官大寺への貢進であることを考えると、同寺の「封戸」の介在も考えられるが、この問題に対して筆者は明確な意見をもちあわせておらず、今後の検討課題とさせていただきます。

四 おわりに

以上、播磨北西部の古代鉄生産について、製鉄遺跡を中心にした考古学的視点からの検討と「讃容郡驛里鉄十連」木簡を中心に検討をおこない、今後の研究に向けて幾つかの視点を提示した。その内容については、ここでは触れないが、考古学

的視点では、土佐雅彦氏の研究をもとに構成し、これまで発表された製鉄遺跡の資料を私なりに精査し、近年の調査成果と広域的視点からの研究を加え近年の研究動向を紹介した。また、文献史料研究の視点として、「讃容郡驛里鉄十連」木簡をとりあげ、周辺の史料を加え、木簡が示す「鉄十連」の具体化を試みた。しかし、当初の目的とした「鉄十連」の大官大寺へ貢進システムの解明には至らなかった。

本稿はひょうご歴史研究室たら・製鉄研究班の播磨北西部の古代鉄生産解明の第一歩目と考え、本稿で抽出した研究の視点からさらに深化させていきたい。

註

- (1) 『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会、二〇一一年。
- (2) 兵庫県生産遺跡調査報告第5冊『製鉄遺跡Ⅱ（波賀町）』兵庫県教育委員会、一九九四年。
- (3) 土佐雅彦「坂遺跡」（『製鉄遺跡Ⅰ（佐用郡）』兵庫県教育委員会、一九九二年）二九頁。
- (4) 『製鉄遺跡Ⅱ（波賀町）』兵庫県教育委員会、一九九四年）一〇六頁。

- (5) 土佐雅彦「永谷C遺跡」(『製鉄遺跡Ⅰ(佐用郡)』兵庫県教育委員会、一九九二年)三五頁。
- (6) 平瀬順一・藤木透「佐用郡の製鉄遺跡」へ『製鉄遺跡Ⅰ(佐用町)』兵庫県教育委員会、一九九二年)六三頁。
- (7) 藤木透「カジ屋遺跡」(『平成二六年度 埋蔵文化財調査年報』佐用町教育委員会、二〇一五年)八頁。
- (8) 藤木透「横坂丘陵遺跡」『製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』(兵庫県教育委員会、一九九四年)六六頁。
- (9) 藤木透「永谷B遺跡」(『平成元年度埋蔵文化財調査年報』佐用町教育委員会、二〇〇九年)六頁。
- (10) 村上紘揚他「Ⅷ西下野製鉄遺跡」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(佐用編)』兵庫県教育委員会、一九七六年)七〇四三頁。
- (11) 一宮町文化財調査報告九『安積山遺跡―第二次発掘調査の記録―』宍粟郡一宮町教育委員会、一九九六年。遺跡の詳細は宍粟市教育委員会田路正幸氏のご教示による。
- (12) 註(6) 七四頁。
- (13) 潮見浩「日本の初期鉄器文化」(『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館、一九八二年)三五二頁。
- (14) 土佐雅彦「佐用郡内の製鉄遺跡」(広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』溪水社、一九九三年)二八六頁。
- (15) 土佐雅彦「播磨の鉄」(櫃本誠一編『風土記の考古学②「播磨国風土記」の巻』同成社、一九九四年)二〇五頁。
- (16) 大道和人「日本古代鉄生産の開始と展開―七世紀の箱形炉を中心に―」(『たたら研究』第五三号 たたら研究会 二〇一四)一〇二二頁
氏は古代の製鉄遺跡を集成し、「箱形炉の設置方法」・「箱形炉の長さ」・「地下構造の構築方法」などの視点から十二型式(A1Ⅰ3型・B型・D1Ⅰ2型・E1Ⅰ3型・北陸型・陸奥南部型)に分類し、古代製鉄の発展段階として、IⅠV期(六世紀第3四半期Ⅰ八世紀第2四半期)を設定している。
- (17) 角田徳幸『たたら吹製鉄の成立と展開』(清文堂、二〇一四年)。
本書に掲載した角田氏の分類基準は以下のとおりである。
A1Ⅰb型：本床状遺構を掘削して構築する。本床状遺構の長さを幅で除した長幅費が概ね三以上となる平面形が細長いものである。両端部の掘り込みが明確ではなく、本床状遺構の排滓部の高低差があまりなく、最終操業面の形状は排滓部と繋がり、全体としては「コ」字状の平面形を呈する。
A2Ⅰa型：本床状遺構を掘削して構築する。長幅費が概ね三以下と幅が広いもので、両端部の掘り込みが明確なもの。
- (18) 武田恭彰「製鉄遺跡について」(総社市文化財発掘調査報告一五『奥坂遺跡群』総社市教育委員会、一九九九年)四九六頁。

- (19) 「原始・古代のちくさ」(『千種町史』一九八三年) 九一頁。
- (20) 山本崇「奈良・大官大寺跡」(『木簡研究』三一、二〇〇九年) 一八四頁。
- (21) 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』七(奈良国立文化財研究所、一九七七年) 三八頁。
- (22) 『延喜式』卷二八 兵部省(黒坂勝美他編『延喜式後編』吉川弘文館、一九八五年) 七一五頁。
- (23) 『倭名類聚抄』卷第八(池邊彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館、一九八一年) 五九六頁。
- (24) 『播磨国風土記』讃容郡中川里条(沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著『播磨国風土記』山川出版社、二〇〇五年) 七二頁。
- (25) 井上通泰『播磨風土記新考』(大岡山書店、一九三一年) 三三二頁。
- (26) 『佐用町史』上卷(一九七五年) 一一五頁。
- (27) 『三日月町史』第一卷 古代(一九六四年) 七二頁。
- (28) 註(14) 書二〇八頁。土佐氏は讃容郡衙跡と推定されている長尾八反田遺跡、白鳳期創建の長尾廃寺がある佐用町長尾付近に中川駅を想定している。
- (29) 註(27) 書七一頁。
- (30) 『令集解』卷卅 喪葬令廿六(黒坂勝美他編『令集解』第四 吉川弘文館、一九八一年) 九六一頁。
- (31) 『令義解』卷九 喪葬令第廿六(黒坂勝美他編『令義解』吉川弘文館、一九八三年) 二九二頁。
- (32) 表2の作成にあたり、奈良国立文化財研究所「木簡データベース」を活用した。
www.nabunken.go.jp/Open/mokkan/mokkan.html
- (33) 『常陸国風土記』香島郡条には、豊香嶋宮への供物のなかに太刀などの武具や鉄素材(枚鉄、鍊鉄)の記載がみえる。植垣節也校注・訳(『風土記』新編日本古典文学全集五、小学館、一九九七年)。
- (34) 樋口知志「二条大路木簡」と古代の食料品貢進制度」(『木簡研究』一三、一九九一年) 一九九頁。
- (35) 「鑄物と鍛冶の工房」(『飛鳥の工房』飛鳥資料館、一九九二年) 四〇頁。
- (36) 天平宝字六年正月一六日「造石山寺所鉄充并作上帳」(『大日本古文书(編年文書)』一五)。
- (37) 渡辺誠「鉄鋌の形」(『史碧』二、一九九二年) 一〜三頁。
- (38) 小田富士雄「大分県下山古墳出土の鉄鋌」(『古文化談叢』第二集、一九七五年) 七七頁。また村上英之助氏も鉄鋌のまとまりに十進法が用いられていたと推察されている(村上英之助「鉄鋌の本質とその編年序説」(『考古学研究』二四―二、一九七七年) 四二頁)。
- (39) 『令集解』卷二三 禄令(黒坂勝美他編『令集解』第四 吉川弘文館、一九八一年) 六五五頁。
- (40) 『国史大辞典』(第一四卷)によると、唐代の重量単位「両」(一一・五グラム)をもとにそれを三倍したものを大両として『大宝律令』に取り入れられている。「鐵一廷一〇斤」は一六〇両、造石山寺所関連文書にみる、一廷あたりの平均値「一廷三斤七両」

は約五五兩と約三倍になる。

(41) 大隅亜希子「律令制下における権衡普及の実態―海産物の貢納単位を中心として―」(『史論』四九、東京女子大学史学研究室、一九九六年) 三九頁。

(42) 畑中彩子「日本古代の木簡を用いた官営工房運営の源流―長登銅山出土木簡と韓国羅州伏岩里出土木簡の比較検討―」(『東洋文化研究』一四、二〇一二年) 四〇三頁。

(43) 中村弘「『播磨国風土記』と播磨国の駅家」(『ひょうご歴史研究室紀要』創刊号、二〇一六年) 五八頁。

表一引用文献

- 文献1 兵庫県生産遺跡分布調査 第一冊『製鉄遺跡Ⅰ(佐用郡)』兵庫県教育委員会 一九九二
- 文献2 兵庫県生産遺跡調査報告 第五冊『製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』兵庫県教育委員会 一九九四
- 文献3 『平成元年度 埋蔵文化財調査年報』佐用町教育委員会 二〇〇九
- 文献4 『平成五年度 埋蔵文化財調査年報』佐用郡教育委員会 二〇〇五
- 文献5 『平成六二年度埋蔵文化財調査年報』佐用町教育委員会 二〇一二
- 文献6 『平成八年度埋蔵文化財調査年報』佐用郡教育委員会 一九九八
- 文献7 『平成六年度埋蔵文化財調査年報』佐用郡教育委員会 二〇〇四

文献8 『平成七年度埋蔵文化財調査年報』佐用郡教育委員会 二〇〇三

文献9 一宮町文化財調査報告九『安曇山遺跡―第二次発掘調査の記録―』宍粟郡一宮町教育委員会 一九九六

文献10 兵庫県文化財調査報告第一一冊 二分冊『中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―佐用郡編―』Ⅷ西下野製鉄遺跡』兵庫県教育委員会 一九七六

文献11 『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会 二〇一一

文献12 『平成六〇年度埋蔵文化財調査年報』佐用町教育委員会 二〇一五